

帰りの電車の中で臨也との恋人ごっこが終わった旨をセルティにメールすると、その日のうちに夕飯を食べに来いと誘われた。さすがに当日はその気になれず断ったが、気を使ってくれているのだろう。頻繁に誘いの連絡が来て、何度かは帝人も了解した。

セルティも新羅も、特に臨也の悪口は言わない。恋人ごっこが終わって良かったとも言わない。ただ、帝人を招いてあれこれと世間話をする。時には大げさに失敗談を話してくれて、腹を抱えて笑ったりもした。

その日も授業が終わって、いつものように池袋の街を歩いていった。歩きながら、今日はスパーに行こうかと考える。

「よお。どうした、なんか元氣ねえな」

ぼん、と軽く肩をたたかれ、振り返れば静雄がいた。いつも通りのバーテン服にサングラス。口元には穏やかな笑み。

「そんなことないと思いますけど」

言いつつ、存外静雄は自分のことを良く見ていたらしいと知って驚いた。普段はなるべく取り繕って笑うようにしているけれど、一人でいるときはどうしても気落ちしやすい。そのうち、恋したことが思い出になるまではそういうもののだろう。けれどまだ臨也と別れてから十日も経過していない。つまり未だ自分は傷心中ということになる。

覚悟していても、失恋というのは結構辛い、と初めて知った。

「あ、僕、臨也さんと別れたって静雄さんには伝えてなかったですよ」

セルティはメールも電話番号も知っているが、静雄は知らない。調べることは容易だったが、そのうち逢えるだろう、と思っていたからその必要性も感じなかった。

「そうなのか。そりやめでてえな」

少しだけ驚いた表情を浮かべて、それから静雄が笑う。どうやら全く知らなかったらしい。セルティも新羅も、彼には伝えていなかったようだ。帝人自身が言うまでは告げるべきではない、と思っただろう。

「じゃ、約束通り奢ってやるよ。そう言えば前回の詫びの分もまだだったよな」

「良いですよ、そんな」

遠慮をしたものの、今日は仕事が終わったという静雄にほとんど引きずられて向かったのはケーキバイキングの店だった。

どうやら静雄は相当な甘党らしい、とその食べる様子を見て知る。

「もつと食えよ。これも旨いぞ。これも」

「いえ、そんなに食べられないですよ！」

甘いものは嫌いではないが、そこまでの量は食べられない。もはや遠慮しているのではなく、本当に無理だと理解してもらうまで努力が必要だった。